

第73回国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 銀賞

富士見丘高等学校 1年

石田 希月

課題 ③

生まれや宗教、性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きることのできる国際社会の実現に向けて。

副題

「自分らしく生きるための第一歩 ～小さな選択から変える未来～」

本文

課題3「自分らしく生きるための第一歩 ～小さな選択から変える未来～」

私たちが暮らすこの日本では、皆が自分らしく生きることができているでしょうか。答えは「No」だと私は思います。顔立ち、体型、服装。私たち女子高校生の間にも、暗黙のうちに「こうあるべき」という基準があり、それに合わせようとしてしまいます。だからこそ、誰もが自分らしく生きられる社会の実現には、まず私たちの身近な日常に目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

イギリスに本社を置く消費財メーカー・ユニリーバ社による調査では、「容姿に自信がない」と答えた日本の若い女性の割合が、世界で最も高い水準にあると示されています。学校生活の中でも、「細いこそ正義」という風潮を感じます。そんな日本での生活を、私は少し窮屈に思う日もあります。自分らしさよりも「正解」に近づくことが優先されているように思えるからです。

私は小学五年生から中学三年生まで、海外で暮らしていました。その間に経験したある出来事は、「自分らしく生きる」とは何かを考える大きなきっかけになりました。ある日、アイルランドの学校の友人から誕生日パーティーに招かれた私は、そこで初めて、友人にはお母さんがおらず、お父さんが二人いる三人家族だということを知りました。私は驚き、言葉が出てきませんでした。しかし、パーティーに集まった人々は、当たり前のようにその事実を受け止め、特別なこととして扱う人はいませんでした。私は、自分が知る形だけを基準に「家族」を定義していたことを恥じ、心から反省しました。今思えば、あの日、アイルランドで目にした光景は、多様な違いを認め合いながら、それぞれが自分らしく生きる社会の縮図だったのです。

私は、八月六日に開催された広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。そこでは、日本人女性初の国連事務次長として軍縮担当上級代表を務める中満泉さんが、アントニオ・グテーレス事務総長の挨拶を代読され、「分断ではなく対話を、対立ではなく協力を、無意味な競争ではなく共通の安全保障を選びましょう」という呼びかけがありました。私はその言葉を聞き、広島 of 教訓とは何だろうと考えました。原爆が奪ったのは命だけではありません。人々の夢や未来、そして自分らしく生きる可能性までも根底から奪い去ったのです。だからこそ、平和とは、単に戦争がない状態を指すのではないと私は思います。誰もが恐怖や差別に脅かされることなく、自分らしく生

きられる状態こそ、真の平和なのだと思うのです。私は、「共通の安全保障」という言葉を、軍事的な安全保障だけでなく、一人ひとりの尊厳が守られる社会を目指す呼びかけだと受け止めました。

改めて日本を見ると、私たちは戦争のない社会で暮らしています。しかし、私たちの周りには、「こうあるべき」という見えない圧力があります。顔立ち、体型、服装。私が冒頭で触れた息苦しさの正体も、まさにこの圧力です。その圧力が、人々から自信を奪い、自分らしさを押し込めているのです。一方で、アイルランドで出会った人々は違いました。家族の形や価値観の違いを、当たり前のこととして受け止めていました。そこには一人ひとりを尊重する文化がありました。互いの違いを許すだけではなく、価値として認め合うこと。外見や家族構成、宗教、性別によって人を判断しないこと。自分と異なる誰かに出会ったとき、排除するのではなく、理解に努めること。そうした小さな行動の積み重ねが、日本を変え、やがて世界へと広がっていくのだと、私はアイルランドでの経験から学びました。だから私は、まず自分自身が外見や家庭環境、文化的背景だけで他者を判断しない人でありたいと思います。そして、違いを尊重できる社会をつくる一歩を踏み出したいのです。広島が私たちに託した平和への願いは、命を守られるだけでなく、自分らしく生きられる世界を実現することでもあるはずです。世界唯一の被爆国である日本だからこそ、一人ひとりの尊厳が守られる社会を実現し、その価値を世界に発信する使命があると私は思います。生まれや宗教、性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きることのできる国際社会へ。その未来は、私たち一人ひとりの小さな選択から始まるのです。